旭川医科大学医師会長
２期目を迎えて

旭川医科大学医師会
会長　東（あずま）　信良（のぶよし）

本年７月より２期目の旭川医科大学病院長を仰せつかり、２期目の旭川医科大学医師会長を務めることとなりました東（あずま）です。

これまでの２年間､旭川医科大学医師会長として、医師会の会員を増やすべく、医師会の役割、会員への恩恵などについて研修医をはじめ職員に周知する努力をしつつ、病院長として病院経営の効率化、タスクシェア、DXなどを進めるとともに、内科大講座制移行、内科合同会議による新たな医師派遣方針の決定などに力を注いでまいりました。

しかし、私が知るところ多くの病院が大変な経営難であり、人事院勧告等による賃金アップと医師の働き方改革のダブルパンチで喘いでいる状況が継続している中、さらに来年度に向けた大幅な賃金アップの勧告による対応を余儀なくされようとしております。人件費増に対する補助等が一銭も無い中で、毎年、数億円ずつ上昇する人件費を賄う小槌はあるはずもなく、多くの病院が破綻の危機へと向かっているのが現状です。

もとより大学病院は、医学生を育てるという根本的で重要な役割を担い、不採算であろうが全ての診療科を揃えることが必須です。これらの条件下で職員は、教育、研究、そして診療にと大変よく働いていただいており、特定機能病院として、最後の砦機能を堅持し、高度な医療を要する救急疾患に対応すべく24時間365日体制で各種専門医をはじめ多くの医療者が待機しています。そのような大事な役割を持つ国立大学病院がかつてない苦境に立たされているのです。令和６年度の国立大学病院の経常損益赤字額は全体で285億円を超え、公立病院等とは違いどこからも赤字補填はされません。かなり大胆な政策転換が成されなければ、今年度、そして来年度と赤字額はどんどん増えるに違いありません。

また、医師の診療科偏在も大きな問題です。先述のような取組で医師の働き方改革を進めて医師の時間外勤務時間の総数は減少していますが、外科特に心臓血管外科や新生児科医師については全く減らないどころか、緊急手術が大学病院に集中し、むしろ増加しています。こういった診療科には直接チームに加わって医師を助ける人手、すなわちナースプラクティショナー（あるいはフィジシャンアシスタント）が臨床現場に入ってこないと外科や新生児科の真の働き方改革は達成できず、そういった診療科を希望する医学生も激減する、それで国民は本当によいのでしょうか。

加えて､看護師の成り手不足は最大の懸念点です。旭川医科大学病院も今年の４月から一つの病棟分の44床を休床せざるを得なくなりました。他の業種と大きく違うのは､医療は人の手を必要とするのです。地方の人口推移予測を見れば今後ますます苦境に陥るのは一目瞭然であり、15から64歳までの人口が20年後には４割減になるという、地方を襲う恐ろしい現実を医療がどう乗り越えてゆくのか、そろそろ万策尽きるのではないかと思います。

そんな中、医師会という大きな力が政府を動かすことを心から願っております。もっと、医療に優しい政治を取り戻し、医学・医療の道に安心して若者が入ってこれる世の中にしてゆかなければならないと日々思うこの頃です。

日本医師会公式YouTubeチャンネルの登録ならびに
日本医師会LINE公式アカウントの友だち追加へのご協力のお願い

日本医師会では公式YouTubeチャンネルやLINE公式アカウントを通じて、さまざまな情報を提供しています。それらの情報をご活用いただくため、ぜひ、YouTubeのチャンネル登録ならびにLINEへの友だち追加を、下記の二次元バーコードからお願いいたします。

●日本医師会公式YouTubeチャンネル

●日本医師会LINE公式アカウント

問い合わせ先：日本医師会広報課　E-mail：kouhou@po.med.or.jp